



次代を担う子を育てるには・・・

校長 永井 有司

錦秋の候、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。日頃から本校の教育活動にご理解・ご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

夏季休業中のこととなりますが、さいたま市教育研究会と教育委員会共催の教育講演会に参加しました。そこでは、神経科学および薬理学を専門としている大学教授の講演を聴くことができました。日常生活や教育現場でヒントになるような内容が盛りだくさんあり、興味深く聴かせていただきました。その中でいくつか心に残ったことがありましたので紹介します。



1つめは、「人は、苦勞した分だけ身に付けることができる」ということです。一般的には、自分なりの学び方や効率のよい学び方を模索しがちです。しかし、教授は「楽をして獲得した知識は、一時的には覚えられても、長期的には残っていかないものです」とおっしゃっていました。小学生に噛み砕いて話すのは難しいですが、まず「自分自身が苦勞を厭わない人」にならなければ、と反省させられました。

2つめは、「人は、先入観があると視野が狭くなる」ということです。実際に画像や映像で確認しながら進めていただいたので分かりやすかったのですが、あるものだけに集中すると、他のものが本当に全く見えなくなってしまうのです。また、小さい子どもならすぐに分かるような絵でも、いろいろな体験を積み重ねて固定観念をもってしまえば逆にとらえられなくなってしまうのです。人は変化を嫌うことが多いものですが、次の世代を担う人材を育てる教育現場にいる者ほど、時代の先を読みながら柔軟な気持ちで視野を広げることが大切だと学ばされました。

3つめは、「現在の職業の65%は人工知能に奪われ、35%の職業しか残らない」ということです。シェークスピアの詩と人工知能が作った詩の区別を専門家ができなかったという例を挙げ、芸術や文学などの創造的な職業でも例外ではないと話されていました。教育も？(汗)。変化の大きい時代に、どう子どもたちを育てていくべきか、示唆に富んだ講演でした。この先、世の中がどんなに変化していても、若田光一さんのように、時代の変化にしっかりと対応して生き抜くことのできる子どもたちを育てなければいけない、と気持ちを新たにすることができました。

* * * * *

「とんとん・・・」校長室のドアをノックする音。誰かと思えばドアを開けると、数人の4年生でした。「校長先生、インタビューをしたいのですが、いつであればお時間がとれますか」と丁寧な言葉遣い。何とアポをとりに来たのです。4年の国語の「学級新聞を作ろう」という単元の取材でしたが、言葉遣いは恐らく担任の先生に指導を受けてきたのでしょう。こちらもかしこまって答えさせてもらいました。「校長先生にインタビューしよう」と決めてきてくれたのは、とても嬉しいことです。質問は4年生らしい内容で、「授業中、校長先生は何をしているのですか」「校長先生にはどんな仕事があるのですか」「校長先生にとって大宮別所小学校の一番の自慢は何ですか」等々。素朴な質問を受けつつ、改めて考えさせられました。「学校の一番の自慢・・・それは大宮別所小学校の子どもたちだよ」大宮別所小学校の子どもたちが、本当の意味で学校の自慢、地域の自慢となるためには、ご家庭・地域と更に連携を深めて教育活動を充実させることが必要と痛感しております。今後共、ご理解・ご協力のほど、よろしく願いいたします。